
クロスオ - バ - ブレイク

デュアル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クロスオ－バ－ブレイク

【Nコード】

N7747X

【作者名】

デュアル

【あらすじ】

ここはアルハザード、そこに13歳を迎えた一人の女の子に間違えるほどに似た純粹無垢な少年が居る一組の家族が住んでいました。今、旅立とうとしている一人の少年、清瞳刹那その運命やいかに。

第一話：旅立ちの日（前書き）

この作品はタイトル通り色々クロスオーバーしていく作品です。

なお、主人公に関してはチートとなっておりますので苦手な方、嫌いな方等な

人がいらっしやいましたら戻るを押して下さい。

それでも見て行ってくださる方は、ありがとうございます。

色々居たらな過ぎる点があると思いますがよろしくお願ひします。

第一話：旅立ちの日

僕の名前は清瞳刹那

今日は僕の13歳の誕生日でこれからお祝いをするところです

「お母様？今日は僕の誕生日なのですけれど……」

不安そうに僕はお母様に聞いた

「そうよ？それがどうかしたの？刹那」

不思議そうにして聞き返してきた

「えっと、その…プレゼントは……？」

また僕は不安そうにして聞いた

「ありますよ」

「本当！」

それを聞いた瞬間僕は素直に喜べた

「ええ、でもお父様がここに帰って来てからね」

微笑みながらそう言った

「うん！ー！」

「元気に、そう返事をした」

「それまで良い子で待ってなさい」

「はい」

それから数十分過ぎて僕のお父様は帰って来た
玄関のドアを開けて靴を脱ぎ、ゆっくりと上がって来る

「お父様、お帰りなさい」

「ああ、今日は良い子にしていたか？」

「はい、していました」

「そうか、なら今からプレゼントを発表するぞ？」

「はい！」

「それはな……」

そう言うと魔方陣が刹那の下に展開されて
高速呪文詠唱を開始していく

「お父様、これはいったい……」

驚き少し途惑いながら、不安そうに聞いた

「君には今から三つの願いを叶えてあげよう」

「三つ？」

「そうだ」

「う・とね、一つ目は外の世界に行ってみたいし、見てみたい」

僕は数分間考えて思いついたようにそう言った

「二つ目は？」

「えっと、一番強い武器が欲しい」

「一番強い武器か・・・最強の武器で良いんだな？」

「うん」

「最後の三つ目はなんだ？」

「えっと、誰にも負けない能力・・・かな」

「決まったようだな」

安心したようにそう言った

「うん」

「お母様、これは一体・・・」

「試練よ」

「試練？」

「そう…刹那、君は今から色々な世界を旅をして、笑い、泣き、色々な人と出会いと別れたりするかも知れないけれど折れずに頑張るんだぞ？」

「はい、分かりましたでは行つて参ります」

「そうだね…まずはここかな」

そう言つと魔方阵が光だし、刹那の体を包み込んでいく

・ 僕はその時は知らなかった、この旅が大変な旅になるという事を・

第二話：転送そしてまた転送（前書き）

誕生日の日に唐突に始まった冒険の旅。

主人公はチ・ト能力を身に付けたようですが
果たしてその能力を扱いきれるのか

その運命やいかに

第二話：転送そしてまた転送

光が僕を包み込んでから数分……
気づいたら光が消えていて目の前に一人の男の人が船の上で立っていた……

「ここは……一体……」

僕は、辺りをよく見回した

辺りは何も無く今立っている所は壇上の魔方陣が彫られているれている場所意外は一面湖だった

「ようこそ、時空の中心の世界へ」

「時空の中心の……世界？」

「そう、ここは色々な時空の中心の世界です」

「時空？世界？」

「そうだね……例えて言えば……」

目の前に居る男の人は少し考えてこう言った

「例えて言えば……君の後ろにある二つの世界あれは月姫の世界であつちがフェイト/ステイナイト/ステイナイト世界」

「えっと、それって確か……」

確か何処かで聞いた覚えがある、月姫という世界は吸血鬼やら代行
者やら魔術師が居る世界で、

フェイト/ステイナイトの世界が、七人の魔術師とサヴァーントが

聖杯を巡る戦争に臨む

確かこんな感じだったと思う……

「そう、今君が考えている通りだよ」

そう言った後、この世界について詳しく説明してくれた

「でも、そんな世界……作っちゃっていいの？」

「まっ、作られてしまった物は仕方ないでしょう

それにここは全ての時空の始まりとも言われているからね」

呆れたようにそう言った

「えっと、そういうえば名前教えもらって良いですか？」

「人の名前を聞くときは、まずは自分から、だよ」

そう言うと刹那のおでこに軽くでこピンをした

「いつ、えっと僕の名前は清瞳刹那です」

でこピンはそこまで痛くなかったけど反射的に一瞬声を上げてしまった

「俺の名前は柊歩だ」

「よろしくね」

「ああ」

「えっと……僕、これからどうすれば良いのかな……」

僕は少し困ったように呟いた

「ん？清瞳って旅初めて？」

「あ…うん…僕の時空ってさ…他の時空とは違って時間の流れが遅いんだ」

「へえ…まあ深くは聞かないでおくことにするよ」

「ありがとう…」

「とりあえず、あの世界に行ってみれば？」

「？」

歩が指差す先は…

「あそこ、無限闘技の世界」

「無限…闘技…？」

「そつだよ？」

「どうして？」

柊は当然のように刹那に言った

「だって清瞳って旅に出た事無いんでしょ？」

「だったらなおさらだよ自分の身は自分で守らないと」

「うん…そうゆうものなの？」

「そうゆうものなの」

「じゃあ、頑張ってみるね」

「おう、頑張ってきて」

「うん」

「あ、それと清瞳の武器はむこうで渡されると思うから」

「？」

「どうして柊さんがその事を？」

「ん・まあ君の親父さんとは昔からの知り合いでね」

少し遠い目をした

「そうなんですか」

「そうだよ」

「それじゃ、送るよ？」

「はい」

「プラグイン・清瞳刹那・トランスミッション！」

「……」

魔方阵がまた光り出し刹那を包み込み移動先に送る……

第二話：転送そしてまた転送（後書き）

はい、書き方が下手で困っている作者です。
次回もお話だけで終わる予定です。
では、また。

第三話・出会いそして契約（前書き）

観覧ありがとうございます。

駄作ですがどうぞ見てやって行って下さい

第三話・出会いそして契約

僕は今、無限闘技世界という所に来ています
今、受付を終わらせて、
担当の人に僕の武器が届いているということなので
捜してもらっています

.....

「えっと…武器これ、みたいですね」

差出された武器は……

えっと、これ……

「……本？」

「はい、これは清瞳様専用の武器だそうです
触れてみて下さい」

「う、うん……」

そう答えて、恐る恐るその武器に触れてみる

ドクン！

その武器に触れた瞬間
なにかの鼓動が一瞬伝わって来たけど

でもすぐ収まった

「どうか、なさいましたか？」

「い、いえ……大丈夫です……」

あの鼓動は何だったのだろうか……

「再度確認します、本日より清瞳刹那様

難易度イクリプスにてご参加でよろしいですね？」

「はい」

「連続10勝されますとエキストラに挑めますのでそれに勝つこの時空から離れることが出来ます。

なお一度負けてしまいますと最初からになってしまいますのでご注意ください」

「分かりました」

その後すぐに用意された、自分の部屋に行った

.....

さっきのは一体なんだったのだろう

それにあの武器絶対、本当に武器なのかな……

確かにお父様に最強の武器を……って言っちゃったけど……

「僕……大丈夫かな……」

そう呟いた瞬間…

ガシャン！！！！

机の上にあった本が落ちたのだ

『痛いさ〜』

「だ、だれ？」

僕以外誰も居ないはずなのに声が出たので、びっくりしてしまった

『聞こわ、聞こ』

辺りを見回すが人影は無く…

『違つさ、下さ下』

えっと…それはつまり、床にある物は本だけというわけで…

「本が喋った!？」

『あ〜もうっ！さっきから本、本うつさいんさ！

あたしにはねえ、ちゃんとアリスって名前があるんだよ』

しかも口悪いし…

「とりあえず、僕は清瞳刹那」

『清瞳・・・』

「どうかした？」

『いや、何でも無いのよ』

「なら……いいけど…」

『……』

「……」

『ねえ、清瞳』

「なになかな？」

『あたしと契約しない？』

「契約？どうして？」

『他の人たちの武器もそうだけど、清瞳が今触っている武器ちよつと特別製でね、契約しないと扱えないよ？』

「……わかった、契約するよ」

『よし、いい子よ』

「それで……その…契約の仕方って…？」

えっと、お父様に教えてもらった事はあるけど…

実際にやったことは無いからな…

『なんだい、そんなのも知らないの?』

「ごめん…」

『まあ、いいさ…今から契約呪文教えるからさ一発で覚えなさいよ
ねえ?』

「う、うん」

絶対無理…

…数分後…

『ど、ど、ど、憶えたか?』

「い、一応…」

『じゃあ、やってみろ?』

「え…ええ!?!」

急展開過ぎ!?!

『そうさ、それとも無理なのかさ?』

「ち、やってみる…」

成功すると良いけど…

『それじゃあ、始めるのさ』

僕はアリスに教えてもらった通りに魔方陣を書き出して
契約呪文を言い始めた

「我使命を受けた者なり、その契約の元我に力を貸せ!!」

闇は混沌に光は秩序に……

そして純粹な心はこの胸に……この手に力を……!!」

そう言った瞬間刹那の魔方陣が強く光る

『契約、承認するさ』

「ふう……」

疲れた……というかまさか、このまま戦うのかなあ……
普通に考えて、勝てない……

『お疲れ様さ、マスタ』

「ありがと」

『マスター』

「何？」

『試合の時間はどのなのさ』

「えっと…」

確か…夕方の4時頃だった気が…

ふいに時計を見た

現時刻…1時

『マスター、少し睡眠を取るのさ』

「どっして？」

『なんとなくさ』

「うん…分かった」

アリスの言った通りにベットについて眠りにこつこつとする

『おやすみさ、マスター』

「うん、おやすみアリス」

そうして僕は少し眠りについた……

第四話：第一回戦

「ん…ここは…?」

多分僕は夢を見ていた……

何処かの時空の海辺で夕日が沈む所だった

少し前の方で男の人と女の人が何か話している様だった

「なあ、永劫回帰を使って代償を払うのってこれで何回目だっけ？」

「なっ…まさか！使ったの!?!」

女の方はかなり驚いた様子で聞き返した

「ああ、というか状況が状況だったし使わざるをえなかった」

「あたしを呼べば!!」「あの状況で呼んでたらもつと被害が甚大だった!!!」「くっ……」

ん…?この声何処かで…それにこの人も……

「チートの代償か…まあ時が戻らないだけまだ、ましか…」

「じゃあまた記憶が無くなって生まれたての姿になってアルハザードに飛ぶの?」

「何時もどつりならそうだろうな、それと…いつもありがとな」

男の方は少し恥ずかしそうに言いながら女の方の頭に手を軽く置いた

「別にいい加減慣れっこさ、それにあたしはあんたの事……」

.....

『マスター！！起きろさっ！！』

「う……うん……」

アリス……か……

『マスター！』

「ん……アリス、どうかしたの？」

布団をはぐり僕は起き上がった

『時間さ』

「え……？」

そう言われて僕は時計を見た

現時刻、午前三時……半

『支度して出た方が良さ』

「うーん……寝る……」

そう言ってまた寝に入ろうとした

『つて寝るなぞっ!』

「によろくん…」

眠い…

『遅刻していったら相手に申し訳無しさ』

「うーん、わかったよ…」

そう言って僕は会場に行く支度をして、試合会場に向かった

対戦会場

メイン会場の入り口の前に立っていた

『マスター、ここに』

「ふう……行くよ、アリス」

『了解さ』

大きな扉を開けて会場の中に入って
メイン会場に入った瞬間…

「照明凄くて少し、眩しいかな……」

天井から出てくるライトが密集して何故か僕に当たっていた
そして何よりも……観客の多さが、観客席一杯になるほど
埋め尽くされていた

『相変わらず、凄しさ…』

「アリスってここに一度来た事があるの？」

『えっ？いや……無い…のさ、それに来ていたとしても
普通に考えて別のマスター…さ』

アリスは素っ頓狂な声でそう僕に返した

「うん…」

そう返事をした瞬間、観客席の上の方の多分…特別観客席だと思
う…

そこから二人組みの男が出てきた、片方は…多分、若くて、体格
の良く、顔立ちの良くて
多分、ここの統一者なのだろう、もう片方も同じだが、グラサン
をかけている

次の瞬間、グラサンのかけている方が、大きな声でこう言った

「さあ始めよう……開幕の時間だ、ぞんぶんに、殺し合え」

その瞬間、会場の観客席の全員が立ち上がり歓喜の声に包まれた

さらに、その男は続けて試合フィールドに居る刹那に指をさし、こう言った

「挑戦者刹那よ、さあ頑張りたまえ」

「頑張ります」

僕は、大きな声で、そう返した

「良い返事だ、では一回戦の相手の登場だ」

そういうと、刹那の位置から反対側にある扉がゆっくりと開きそこから、いかにも強そうな大男が出てきて…

「ほお…青いな、我が名はウルト・ペルモンド」

「えっと、僕は清瞳刹那と言います」

「では………始めっ！」

そう、グラスサンが言った瞬間、ウルトが即座に刹那に向かって行く

『マスターッ！』

「分かってるよっ！！」

僕はウルトが向かって来るのに対して

ウルトの方を向きながら足を引きずりつつ距離を取っていた

「逃げるか」

そう言うと刹那に向いながら手に持っている巨大な大剣を軽々と振り下ろした

「…っ！！」

刹那は手に持っているアリスを両手で持ってウルトの振りかざした剣を必死に耐えていた

「ほお…我が剣を受け止めたか、貴様何者だっ！」

「えっと、ただの人間ですけど…っ！！」

「ただの人間が我が剣を受け止めきれぬわけが無かるっ！」

「えっと…でもっ！！」

「ふんっ！！」

ウルトは更に力押しをして刹那を押し潰そうとした…が

「くっ！！…アリスっ！！」

刹那は押し潰される寸前で避けてさっきよりも更に距離をとった

『了解さっ！！』

第五話：目覚め行く才能

.....(回想) 試合会場に行く途中.....

「そう言えば、アリス？」

僕は歩きながら疑問に思っていた事を聞いてみた

『あにや』

「出合った最初に成り行きで契約しちゃったけど
契約するって事はそれなりの能力なんでしょ？」

『確かにそうさ、というかそうじゃ無かったら契約なんてしないさ』

「その、アリスの能力って…何？」

『能力は……秘密さ』

アリスは少し声のトーンを落として言った

「え……？」

『現状は…あくまで、マスタの補助しかできないのさ』

「そっか、じゃあ僕が頑張らないとね」

『そうさ、それとマスタ』

「ん？なに？」

『マスタ - の能力って何さ？』

「分からない」

『分からないってどうゆうことさ』

「どうゆう事って言われても…お父様にいきなり
三つの願いを叶えてやろって言われて…」

『その願いをなんて答えたのさ？』

「えっと、外の世界を見てみたいと、最強の武器と、誰にも負けな
い能力って言った」

『へえ…』

「？」

『マスタ - 』

「はい？」

『どうして制御リミットが、かけられてるのさ？』

「あ…うん、小さい時に、ちょっとね…って、なんで分かったの？」

『あたしとマスタ - は契約した時に能力等を共有してるから分かる
んさ』

で、どんな事をしたのさ?」

「えっとね……確か、召喚契約魔法を発動させちゃって……」

『いくつの時さ?』

「えっと確か……四歳の時かな」

『その魔法今、使えるのさ?』

「使えると思うけど……どうして?」

『なんとなくさ』

アリスは少し嬉しそうに言った

「そう……」

共有……か、じゃあ、あの夢はアリスの記憶の一部だったのかな……?

……対戦会場……

「まだ、逃げるかつ!」

そう言ってウルトが刹那のところへ一歩踏み出した時
ウルトの動きが止まる

「束縛、発動!」

刹那がそう言った瞬間、ウルトの足元に描かれている
六望星の魔方陣が光だし束縛魔法が発動する

「なっ！…貴様、いつの間に！」

「えっと…、逃げてる時に、足を引きずりながら走っているの」

ウルトは記憶を探り、思い出したかのように言った

「まさか、あの時か！！」

「うん」

「うかつだ…外見はただのひよっこと思いきや
ちゃんと考えていたとは…」

「それに、さっきの受け止めきれていたのは
身体強化の魔術をかけていたからです」

「貴様、年いくつだ？」

「えっと…13です」

「ほう…随分と頭が回るようだな」

「いえ、そうゆう教育しか受けて来なかったのです…」

「そうか」

「えっと…」

そう言いかけ刹那は特別観客席のグラスン男の方に向き

「気絶でも良いんですか？」

「問題は無い」

「分かりました」

そして刹那はウルトの方に向き直り、決める体制に入った

「決めますね」

「……」

「ハアアアアア…ッ！！！」

自分の魔力を左腕に円状に集中させていく

「なっ…！」

「ハアッ！！！」

刹那はウルトの腹部に左手を拳にしてストレットで当てたと同時に密集していた魔力が開放されて爆発と同時に衝撃波として当たり

ウルトは端の壁まで吹き飛ばされた

辺り一面砂煙が舞い上がり視野が急に狭くなる

観客席も急激に静まり返り皆ウルトがどうなったか気になる様子

「…やったか…？」

確かに手応えは有った

束縛の魔術でがっちり固定して急所に確実に狙った

しかもあの技は僕の中で一番威力の高い技だ

多分これで起き上がれるはずは…

段々と砂煙が少なくなり次第にウルトの姿が見えてくる

この時まだ自分の世界から出たことの無い刹那は知らなかったのだ
上には上が居るといふ事と、自分の力量がどれだけの物なのかを…

「ふっ…やはりこの程度か、君は戦いには才が有る様だが」

さっきの刹那の攻撃があまり効いていなかったのか、ほとんど深い
傷は無く立ち上がって来る

「効いてない……?」

「一応効いたが」

大剣を持ち直して刹那の所に向かって行く

「かごから出たばかりの鳥に自分の力量など解るまい、ふんっ!!」

一振り大きく振りかぶった大剣が刹那に当たり軽々と端に吹き飛
ばされかなりの衝撃が刹那に加わる

「がはっ…」

口から血の塊りだし、意識がもろろつとします

「これで終わりだな」

左斜めに大きく振りかぶり刹那が切られる寸前

- - - - -
- - - - -
- - - - -

set:アリス

『マスタ・右に避けるさっ!』

本当、見ちゃいけないよまったく…

「わ、わかった!」

清瞳はアリスの指示通りに右に動きギリギリの所でかわして
ウルトから距離をとった

「もう魔方阵は効かぬぞ?」

「正直…キツイかな」

『……………』

あのウルトって奴かなりの腕のようさ、しかも力ではうちの今のマスタ・が勝てるはずも無いくらいに
スピードもそこそこの有るみたいだし…ん?力で勝てないのなら…

『マスタ・』

「うん?」

アリスは清瞳にだけ聞こえるように呟く

『落ち着いてよく聞きな、マスタ - はあのウルトって奴には力では絶対に敵わない、でもマスタ - には技があるだろう？』

いいかい、ああゆうタイプにはね絶対隙ってもんがあるんさ、そこをよ - く見逃さずにするんだよ』

「分かった、やってみる」

『頑張れさ』

この自信といい体の動きといい、かなり良い線まで行きそうさ

それにこの子：吸収力が並大抵のもんじゃないねえ、この子ならもしかしたら…

- - - - -
- - - - -
- - - - -

set：刹那

隙か、あんまり無さそうだけどやるしかないか

アリスは本だから投げ当てるって事も出来るけど、後で怒られそう
で怖いな

となると僕の足か腕のどっちかで決めなきゃいけないのか

多分もって後三撃かな、こんな事になるなら自分の身を守るのに近
接と治癒以外の事をもっと学んでおけばよかった…

…治癒？今、一時的な麻痺の魔術を使えば勝てる可能性は一応は見
えてくるか…

「temporary paralysis（一時麻痺）」

僕は背中を中心に関節や強く痛みを感じる所に麻痺を欠けた
やばい…！ けっこう意識がもうろうとしてるな、早く決めないと倒れ
ちやう…

「ほう、だが次の我の一撃で意識を無くさせてやるう」

距離を詰める様に刹那に向かって行く

「ルーン・セット」

刹那がそう言うと同時に両腕、両足にルーンの文字が浮かび上がる

「何をしようとしているのか知らんがもう遅いっ！」

ウルトが大きく大剣を持ち上げた瞬間

第六話：一回戦終了

「今だ！」

僕は即座にウルトの真後ろに回り込んだ

「ちっ…外したかった、ん？」

振り下ろした大剣は思いのほか深く刺さったらしく簡単には抜けなかった

「昇竜拳!!!」

大剣を抜こうとしている所に叩き込み空中に高く上がり急速で落ちてくる

「ハアアアアアアアッ!!!」

「なっ…」

ウルトは体制を立て直そうとするが地面に着く寸前

「魔神拳!!!」

刹那から放たれた刃は普通より鋭くて普通より速かった

「ぐはっ!!!」

壁端に叩きつけられたウルトは血の塊を出して直ぐ気絶した

「はあ………はあ………はあ………勝った………のかな………？」

一瞬静まり返った観客は一気に盛り上がった
そして黒メガネの男が「静粛に」と一声かけてまた静かになる

「勝者刹那第一回戦突破おめでとう
では勝者には二回戦をする権限と休暇を与えようそれは後で通達する」

「分かり………ました………」

あ………限界だ………意識が………途切れる………

「マスター！！マスター！！」

刹那はそれを言うと同時に倒れ込むようにして倒れた
異変を感じ取るようにアリスは叫ぶが気を失っていった

.....

ふと目が覚めるとそこは自室の天井が見えた
体の方が少し重いな……

そう思い僕は体の方に目をやると
そこには見知らぬ銀髪のロングでような女の人が僕のベットに倒れるように寝ていた

「ん………起きた？マスター………」

「えっと………その声………アリス？」

「ん？ああ…この形態時の姿はまだマスタ - に見せてなかったっけ」

「うん……というか僕より年上だったの！？」

「う - んまあそうなるかな、マスタ - は確か13歳だったよね？」

「うん昨日13になったばかりです」

「敬語にならなくていいよ、私は15歳だから二つ違いだね」

「え、えっと…よ、よろしくお願いします」

「ほらほら堅いよ？」

「よ、よろしく」

「うん、よろしくね」

「というかその…ぎゃつぷが……」

「ギャップ？ん - 本の時との？」

「うん」

「あ - 基本、本とかの形態時はあのしゃべり方だからこのしゃべり方はこの形態の時だけだよ？」

それは私を作った人に言っただけです

「う、うん」

「あ、そうそう通達の紙、来てたよ？」

「何処？」

「テ・ブルの上に置いておいたから」

「よい…イッテ…！」

起き上がるうとした瞬間かなりの激痛を感じた

少し布団をはぐってみるとほとんどミイラのような包帯の巻き方が
されていた

あれ、麻痺かけてたけど…実際かなり重症だったんだ…

「アリス、紙を取ってくれない？」

「了解しましたマスタ…」

そう言うとアリスはテ・ブルの上にある通達の紙を直ぐに持ってき
てくれた

「私が持ってマスタ…が読みますか？」

「ううん、アリスが読んで」

「了解しました、では音読で読みますね」

「ありがとう」

「第二回戦進出おめでとうございませす、戦闘終了後すぐに倒れたと

言うことなので大丈夫でしょうか？

ともあれ二回戦は一週間後になりますので当日になりましたら、また会場までお越しく下さい

……とのことです」

「アリス、僕が眠っていた期間って何日くらい？」

「そうですね……二日位ですね」

「後五日か……とりあえずこの傷を……」

「待って、今治すから」

そう言うとは処からかアリスは500mlのペットボトルを取り出した

「それは？」

「グリーンポーション売店で売っていたから買ってきたの」

「まあ早く治るに越した事は無いか」

そう言いながら僕はキャップを開けて一気に飲み干した
飲み終わった頃にはすっかり傷が治って痛みも引いていた

「凄い回復力……」

「そうかな？昔から治るのは速かったんだけど……」

それとアリス僕の事は刹那でいいよ」

「どうしてですか？」

「うーん…マスターって呼ばれると何故か壁が出来てる様で何か嫌だ」

「そうですか…」

「それに一回戦だってアリスが居なきゃ完全に勝てなかったよ？だからそのお礼も兼ねてかな、それじゃあダメ…かな…」

少しうつむき残念そうな顔をする

「わ、分かりましたよ」

「本当？」

「はい！」

「本当に本当？」

「本当に本当です！」

「よかった」

そう言いながら刹那はアリスの頭に手を置いて優しくなでる

「ふにゅ…」

「頑張ったご褒美だよ」

「あ、ありがとうございます……」

アリスは少し顔を赤らめながらそう答えた

第七話：訓練と依頼

『刹那、では今からアナザースペースを作って訓練を開始しますね』

「うん、お願いするね」

『了解しました』

急に部屋の風景が変わり山の中の森林になった

「で、アリスの形態の説明だよな？」

『はい私には基本形態として、本もしくは人型となります。』

「基本…って言うことは他にも有るの？」

『流石はマスタ・当たりです、戦闘用として大まかに二つ、剣と盾になります』

「えつと銃は無いの？」

『刹那の戦闘スタイルに合わせているので、遠距離は苦手と判断したので形態からは外しましたが必要ですか？』

「うーん、実のところ銃の命中度あんまり高くないから…って一回の戦闘でよくそこまで見極められたね」

『いえ明らかに超近距離戦闘スタイルでしたのでおそらく遠距離型』

『は苦手かと』

「遠距離も練習しなきゃ」

『ですね、刹那は治癒を扱えるんですけどよね?』

「うん、使えるよ」

『どの程度ですか?』

「うん…一応上級までは使えたかな」

『他に…能力は?』

「旅に出る前に使ってたのは…治癒と強化と投影、魔術と魔法かな」

『ふむふむ』

「今は…まだ分からない」

『そうですか…』

「じめん…」

『いえ、謝る事ではありませんよ、これから知っていけばいいんです』

「分かった」

『とりあえず必殺技を身に着けましょうか、軽く固有結界を一つ覚

「おはよ、それにしても千歳の寝顔は可愛いね」

「そ、そんな事な、無いよ」

「私なんかよりひかりの寝顔の方が絶対可愛いよ」

「何っ、いつ見たし」

「うーん…夜中にお手洗いに行く時とかかな？」

「なぬっ…まあ千歳だからいいけど」

「えへへ」

郵便受けに二通の手紙が届く

「…っと何時もの人から千歳、仕事だよ」

「内容はどんなの？」

「えっと…」

「どれどれ？」

千歳と呼ばれた少女が自分の手紙の方に目をやる

「あ、いつもの人だ今回は…殺し屋か」

「……」

ひかりと呼ばれた少女が千歳の方に向くと顔色を変えた千歳がいた

「千歳？」

「う…そ…」

「えっと、この人千歳の大切な人？」

「う…ん…」

ゆっくりと頷く

「どの位なの？」

「えっと…小さい時の頃…確か6歳まで一緒に住んでたから…」

「までって事は…離婚か何かしたのかな？」

「うん…私がお父さんに付いて行って お兄様はお母さんに付いて行ったの」

「どうする？無理なら私が引き受けるけど？」

「ううん…私宛に来たのなら私がする…」

「千歳は強いよ、そして優しい」

千歳の後ろからひかりは包み込むように抱きしめた

「そんな事…無いよ…」

「優しいよ、私なんか感情に浸る前に仕事を済ませちゃうからある意味千歳が羨ましいよ」

「ありが…とう…」

「それに千歳のそんな暗い顔見たくないしね、このこの」

わき腹と背中をくすぐり始まる

「くぷっ…」

「あ、今笑った？」

「うん、ありがとうおかげで元気でた」

「よかった、うん」

「ひかりの今回の対象は？」

「同じ鬼の宿ってる人だよ」

「どんな人？」

「うーん…私が居た世界の隣町の人かな、だから噂でしか聞いたこと無いんだけどかなりかつこいい人らしいよ？」

「性格とかはどうなの？」

「性格は…緋弾のアー…じゃなくてどこぞの主人公みたくかなりのキザ台詞を言うらしいよ？」

「そんな幻生物存在するの？」

「みたい、実際に会ってみないと判らないけど、というか千歳も一応幻生物でしょうが」

「そうかな？タイムスの特に三咲町だと沢山居るって話だよ？」

「沢山かぁ…」

「うん」

「ただねえ…その人の居る場所が」

「場所がどうかしたの？」

「場所が時空管理局なんだよねえ…」

「うぁ…」

「しかも隊長さんやってるらしいし、どこの神帝も居るからどうにかしないと…」

「失敗すれば捕まるもんね…」

「まあ捕まったら捕まっただで策はあるんだけどね」

「やっぱり頭良いよひかりは」

「そんなことないよ、千歳の方は？」

「無限闘技に居るみたい」

「あそこは公式で殺し合いしているから意外とそっちの方が楽かもね、難易度は？ノーマル？ハード？」

「ううん最高難易度イクリップスみたい」

「イクリップスって…確かチートな皆さんが集まる所だよね？なんか急に心配になってきた」

「多分大丈夫だよ、射撃型だからそう易々と相手の間合いには近づかせないよ」

「そっか、それなら大丈夫そうだね」

「うん、じゃあ私先に行くね」

そう言つと千歳の愛用古代ベルカ式スナイパーを片手に玄関に向かう

「いつてらっさい〜」

手紙の内容は無限の闘技に場居る清瞳刹那及び時空管理局機動六課隊長北条飛鳥の殺しの依頼だった……

第八話：特訓と二回戦

「ふう…できた」

そこにはフェイトステイのアーチャーの作り出す無限の剣製より精密さが増した無限の剣製が出来上がっていた

『流石、多分本家よりも精密は高いと思うよ?』

「そ、そうかな」

『はい』

「まさか二、三回で出来るとはね…」

『そうですね、私も刹那の飲み込みの速さにはかなり驚いています』

「アリスもつと教えてくれないかな」

『もつと覚えたくまりましたか?』

「うんもつともつと沢山の技とか術とか知りたい」

その瞳は何も知らなかった純粋な子供が初めて何かの楽しさに気づいた、そんな瞳をしていた

『分かりました、ではまた一段階上げた技等を教えますね』

「うん」

.....それから5日後.....

会場入り口前に僕は立っていた

「行くよアリス、勝って上へ行くんだ」

『そうさね、長居もしてられないさ』

「うん」

入口のドアが開いて中に入ると相変わらずの観客の多さと照明の眩しさだった

「さて、次はどんな相手だろうね」

『分からんさ、でもどんな相手だろうと全力で行けば勝てるもんさ』

「だといけどね」

反対側のドアが開き相手が入ってくる

そこには時空の中心で出会った柊歩の姿があった

「あ、最近会ったね」

「ここに出たの？」

「うん、僕側としては一回戦目なんだけどね、そっちは？」

「一回戦目だよ」

「まあ、自己紹介辺りは要らないよね？」

と五尺余りの刀を鞘から抜き中段の構えをする

「アリス、形態刀」

『了解さ』

此方もアリスを刀にして構える

「へえ…目には目をねえ…まあいいや先に攻めさせてもらおうよ」

言った直後突進するかのように刹那の目の前に現れて刀を振う
刹那、本能的に身の危険を感じた僕は無意識に自分の刀で受け止め
相殺する

「あぶっ…」

し、死ぬかと思った…

「以外だ、ちゃんと戦いの腕あるじゃん経験はまだまだみただけ
ど」

「昔から物の飲み込みは力は異常だったから」

「ほら次ぎ行くよ」

二撃目、三撃目と次々とくり出す刀と刀のぶつかり合い
次第に衝撃波が出る様になっていた

…強い…一瞬でも気を抜けば負けるっ！！

と思った瞬間刹那の右肩に歩の刀の刃がかすめる

「くっ…！」

「そろそろ限界っばいね」

そう言つと歩は上段の構えをした、その構えは照明で反射していて眩しすぎるくらいの美しさだった

「秘剣……」

反射的に数歩下がり距離をとった

「アリス、形態三！」

『了解さ』

刀から瞬時に円状の盾に変わる

耐えられるか…？

「燕返し…！！」

と同時に歩の技が盾に連続斬りが当たる

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7747x/>

クロスオ - バ - ブレイク

2011年11月24日01時46分発行